



*Oka-Neta Satoyama-Satsumi Art Project 2013*

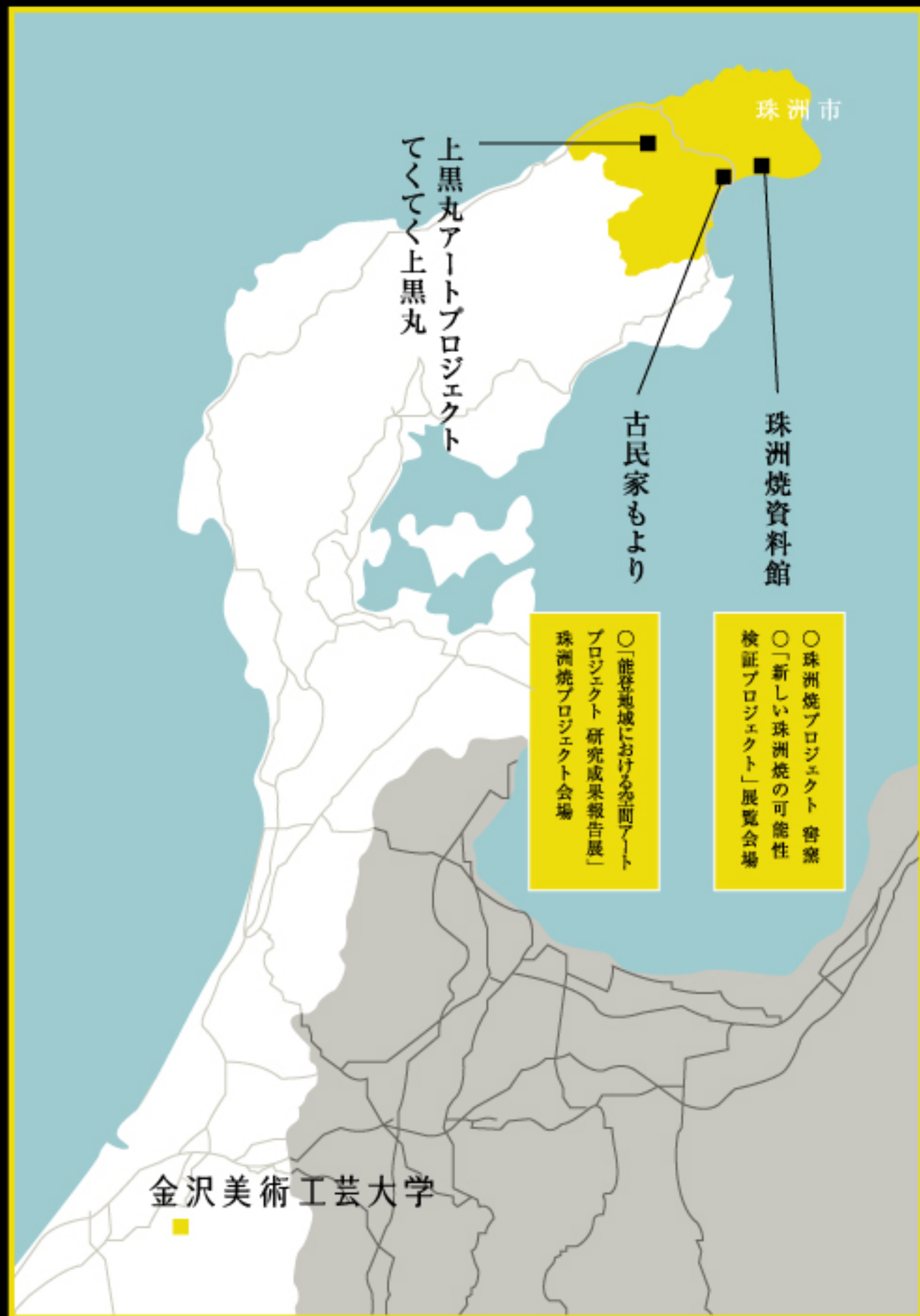
奥能登里山里海  
アートプロジェクト

活動記録誌 二〇一三





1	目次
2	地図
3	プロジェクトについて スケジュール
6	珠洲焼プロジェクト 珠洲焼インスタレーション
7	新たな珠洲焼の可能性検証プロジェクト
8	風の音プロジェクト
13	上黒丸アートプロジェクト2013
21	てくてく上黒丸
25	関連イベント 北川フラム氏講演会 奥能登シンポジウム
27	ディレクターより
33	媒体情報
34	クレジット



## プロジェクトについて About Project

奥能登の里山里海において、金沢美術工芸大学の学生・教員や国内外のアーティストが長期滞在しながら地域の住民と連携してアート作品を制作します。フィールドワークによる現地調査を行い、地域の特性を活かした奥能登独自の事業を展開し、再生された古民家や廃校となった小・中学校などで、その場の空間を取り込んだ展覧会を行っています。

地域の風土や歴史とアートを融合したアートプロジェクトを行うことは、東アジアに囲まれた環日本海を中心に位置する奥能登が、世界に開かれた多文化共生・交流推進の中心的役割を担えることを実証することになります。その成果を継承して、近い将来に奥能登において風土と歴史を取り込んだ国際的芸術祭が開催されることをめざしています。



Our team is comprised of students and staff members from the Kanazawa College of Art and artists from Japan and abroad. We plan to stay in the countryside (Satoyama-Satoumi) of Oku-Noto region over a period of time and produce artwork in collaboration with the local residents. We will undertake a thorough field survey in order to fully incorporate the unique characteristics of the region into our project and exhibit our creations in spaces such as restored old houses and closed schools. Through our project, we endeavor to create artwork that incorporates the local environment and regional history. In so doing, we open our doors to the world in celebration of cultural diversity and the promotion of international friendship and cooperation. Oku-Noto will play a pivotal role in this endeavor, not only as the geographical center of the Japan Sea Rim and of East Asia at large, but as an artistic and cultural hub that facilitates cross-cultural communication. As part of the project, we aim to organise an international art festival in Oku-Noto in the near future.

## スケジュール Schedule

		2013年1月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2014年3月
珠洲焼プロジェクト	珠洲焼 インスタレーション		●—●					●	◎—◎
	新たな珠洲焼の 可能性検証プロジェクト		●—●	7.7-7.12 第2回目焼成 窯出しは23日			12.1 窯入れ	◎—◎	◎—◎
	風の音プロジェクト		●—●		ワークショップ 9.2,3,6,7,8, 10,11			◎—◎	◎—◎
上黒丸2013			7.13 上黒丸アートプロ ジェクト開校式			10.13-10.27 上黒丸2013			3.26-3.30 研究成果報 告展珠洲焼 プロジェクト
てくてく上黒丸				8.16,8.17 能登再生フィールド学 8.18,8.21 フィールドワーク		● 9.23 プレゼン	● 10.13 実行	● 10.11 サイン完成	
関連イベント	◎ 1.13 北川フラム氏講演会							◎ 11.30 奥能登シンポジウム	





珠洲焼プロジェクト

珠洲焼インスタレーション

新たな珠洲焼の可能性検証プロジェクト

風の音プロジェクト

珠洲焼インスタレーション  
Suzuyaki Installation

珠洲市で掘り出され調査された陶土3トンを金沢美術工芸大学へ運び陶板を制作します。その陶板を珠洲市の珠洲焼資料館内に復元された穴窯で焼成します。焼成された陶板上に珠洲の天然塩と珪藻土を置いて構成された作品を珠洲市飯田地区にある古民家に運び込み、その場との対話を重ねながら作品を設置していきます。日常の空間が非日常的なアーティスティックな空間に日々変容して行く過程が見られる展示を行います。地域の風土や歴史から生まれながら忽然と姿を消し近年再興された珠洲焼と現代アートを融合したアートプロジェクトは、地域の特性を活かした、その地域でしか成立しえない新たな可能性を創出する試みです。

Three tons of clay sourced and prepared in Suzu were formed into slabs at the Kanazawa College of Art and later transported back to Suzu to be fired in the recently restored anagama ("cave") kiln at the Suzuyaki Museum. We exhibited the finished pieces inside a traditional house in Uedo-machi, Suzu, upon them displaying the local salt produced through the agehama method (extracting salt from sea water tossed over sand). We positioned each piece through continuous dialogue with the venue itself. The exhibition showed the gradual transformation of an ordinary space into an artistic one.

The technique of Suzuyaki, which had long been forgotten, re-emerged in recent years. Our project is part of a broader effort to restore and revitalize this lost tradition. Therefore, it is our mission to draw inspiration from the locale, incorporating its unique characteristics but at the same time combining them with modern art in order to explore new possibilities of Suzuyaki.

参加者 | 真鍋淳朗 新谷健太 楓大海

Schedule

2013年	
6月5日	初回ミーティング
6月11日	制作
7月7日	窯入れ
7月23日	窯だし
12月1日	窯入れ
12月18日	窯だし
2014年	
3月26日-30日	研究成果報告展





## 新たな珠洲焼の可能性検証プロジェクト

*Project to explore the new potentialities of Suzuyaki*

珠洲焼は、中世の日本を代表する陶磁器のひとつで12世紀後半頃から15世紀末頃に能登半島にある珠洲市付近で生産されました。古墳時代から平安時代にかけて焼かれた須恵器の技法を受け継ぎ焼成されていた焼物です。約500年前に忽然と姿を消した珠洲焼は冷却炭化焼成された黒い焼き物で、それは現代空間でも十分魅力的です。珠洲市は1978年に陶芸実習センター（現珠洲市陶芸センター）を開設し、現代に開いた珠洲焼としての振興を目指しています。

新たな珠洲焼の可能性検証プロジェクトは、珠洲焼の素朴さ、優しさ、暖かさ、石川県の貴重な文化遺産を現代空間の中でその魅力を多くの方に知って頂き、発見、振興、復興に繋げることを目的としています。又珠洲焼の魅力を露らせ、現代空間における新しい珠洲焼の作品制作を目指します。

The production of Suzuyaki flourished between the mid-12th and late-15th centuries around the city of Suzu on the Noto Peninsula and it is considered to be one of the representative styles of Japanese pottery during the Middle Ages. The Suzu firing technique was largely inherited from that of Sueyaki, which was prominent during the Kofun period (circa 250-538 CE) through to the Heian period (794-1185 CE), and are still considered charming even by today's standards. Suzuyaki production suddenly came to a halt around 500 years ago; however, since the opening of the Ceramic Art Training Center (present-day Suzu Ceramic Art Center) in 1978, the city of Suzu has been promoting a modern revival of Suzuyaki.

We endeavor to explore the potentialities of Suzuyaki in a modern setting. Through our project, we intend to promote Suzuyaki as an important cultural heritage of Ishikawa Prefecture. We urge people to discover its simplistic beauty, energy, warmth, and many other appealing qualities.



参加者 |  
板橋 貴美 戸出 雅彦 吉村 安司 鹿江 明



### Schedule

2013年	
6月6日	初回ミーティング
6月11日	制作
7月7日	窯入れ
7月23日	窯だし
12月1日	窯入れ
12月18日	窯だし
12月19日-1月19日	珠洲焼資料館 4人展
2014年	
3月26日-30日	研究成果報告展

## 風の音プロジェクト

*The Sound of the Wind Project*



私たちの生活の中には水の音や風の音など、様々な自然の音に溢れています。しかし、それらの音は身近にあるからこそ、普段は聞き流してしまい注目しないものです。この「風の音プロジェクト」はそのような普段聞き流してしまうような音を視覚化しようという試みです。今回はとくに「風」の音に注目するために風鈴という媒体を使用します。風は世界中をめぐっているものであり、珠洲という日本の田舎の町にも世界中を巡った風が吹いていることを連想しました。珠洲焼きという珠洲の土着のものに触れた風がまた世界を巡ることは珠洲の象徴を世界に発信する様子をイメージしています。そのイメージから発展させ、展示場所も珠洲の象徴であると言える「棚田」を選びました。

In our daily lives, we are surrounded by various sounds of nature, such as wind and water. However, because these sounds are so familiar to us, we tend to let them pass by without paying attention. The Sound of the Wind Project is an attempt to visualize the sounds we normally ignore. We will focus on the sound of the wind by using wind chimes as a medium.

Wind is ubiquitous. The wind that blows in Suzu travelled throughout the world before reaching here. The wind that touches Suzuyaki, the indigenous ceramic art of this land, will once again travel throughout the world. The symbol of Suzu is therefore being transmitted around the globe. Developing this concept, we chose the terraced rice paddies that symbolize the culture of Suzu as the exhibition space for this project.

参加者 |  
土井 宏二 原田 昌典 神谷 純子 杉倉 栞恵  
梅澤 綾子 岩佐 美希 中川 菜風乃 白石 くるみ  
田島 志緒理 倉持 歩 合田 梢

### Schedule

2013年	
6月5日	初回ミーティング
7月7日	窯入れ
7月23日	窯だし
9月2・3・6・7・8・10・11日	風の音ワークショップ 会場：金沢中央公園
2014年	
12月1日	窯入れ
12月18日	窯だし
3月26日-30日	研究成果報告展









## 上黒丸アートプロジェクト

Kami-Kuromaru Art Project

珠洲市の若山町上黒丸地区は、奥能登の海に面しない中央の山麓にあり、里山を代表する存在です。静寂と共に広がるその佇まいや景観は桃源郷の如く美しく、その歴史や営みは神秘的な物語に包まれています。私達は1年半に及ぶ現地視察と上黒丸の旧小学校での長期滞在を通じて、その微細な空気と自然に対峙して来ました。そして今、多くの人との交流から得た知恵と新たなインスピレーションは、創造へと回帰しこの地に放たれます。紡ぎ出されたひとりひとり、そしてひとつひとつの物語がここに始まります。

The district of Kami-Kuromaru in Suzu is a typical satoyama situated in the interior of Noto Peninsula at the foothills of the central mountains. Peace and tranquillity spread over this land, and the beauty of its scenery is reminiscent of the ethereal utopia depicted in Chinese fables as Peach Blossom Land. The history of the land is permeated by local legends and mystical stories. Over a year and a half, through our fieldwork and sojourn to an old primary school in the village, we were exposed to its impressive nature and unique atmosphere. And now, all the knowledge, wisdom, and new inspiration acquired through our many valuable encounters will be returned to the land via creative engagement. The story of each person is about to begin.

参加者 | 秋吉かずき 大岡美幸 中瀬康志 別府充貴 山内祥太

## Schedule

2012年	リサーチと2013年度の準備
2013年	
2月10日	下見
7月13日	開会式
9月15日	滞在制作スタート
10月13日-27日	「上黒丸2013 —奥能登 秘められた場所から 始まるひとつひとつの物語—」
10月13日	上黒丸天体観望喫茶室
10月20日	金沢美大バスツアー
10月27日	案検ワークショップ



上黒丸アートプロジェクト開会式

「すてきな散歩道実行委員会」が主催し、まずは実行委員会から1年間の活動報告が行われました。引き続き、上黒丸アートプロジェクトの実行委員会による今後の現地制作の方法や具体的な作品内容についての説明が行われました。



上黒丸アートプロジェクト二〇一三

上黒丸アートプロジェクト





能登地域における空間アートプロジェクト 研究成果報告展 珠洲焼プロジェクト 会場 | 古民家もより



## 上黒丸2013-奥能登 秘められた場所から始まるひとつひとつの物語-

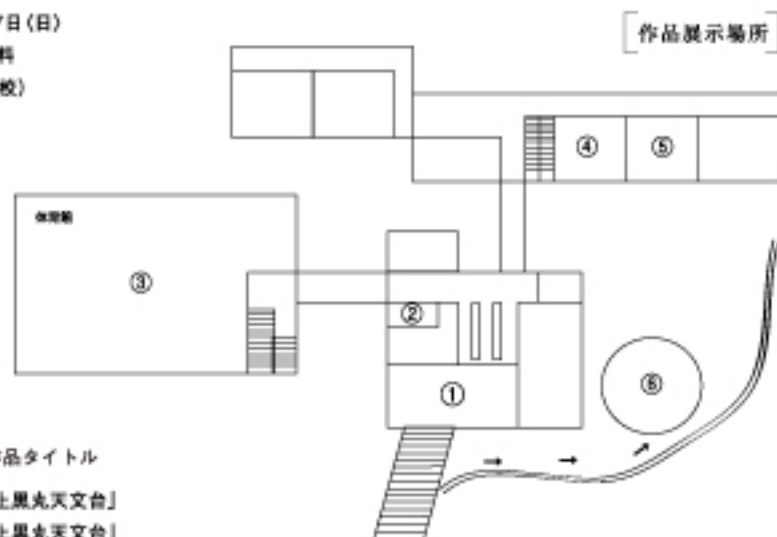
Kami-Karumaru 2013, Oka-Note: Each Story emerging from a Hidden Location

会期:2013年10月13日(日)-10月27日(日)

開催時間:9:00~18:00 料金:無料

会場:生涯学習センター(旧上黒丸小学校)

主催:奥能登里山里海アート  
プロジェクト実行委員会  
助成:石川県大学・地域連携研究  
プロジェクト支援事業  
協力:珠洲市/若山町/上黒丸ステ  
キな散歩道実行委員会/会沢美術  
工芸大学/中瀬康志研究室

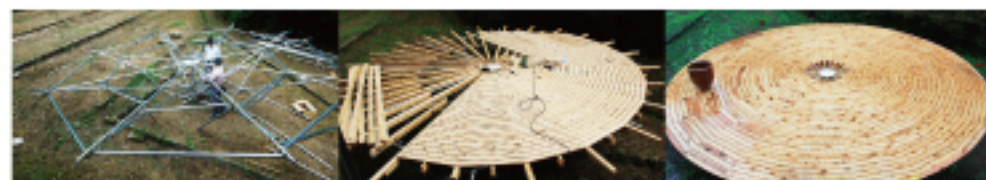


作品	場所	作者	作品タイトル
①	ピロティ	秋吉かずき	「上黒丸天文台」
②	更衣室	秋吉かずき	「上黒丸天文台」
③	体育館	山内祥大	「狭く間に」
④	教室Ⅰ	大淵美幸	「世界を揺る空想と遊び、此処の記憶から個々の記憶へ」
⑤	教室Ⅱ	別府克貴	「サルでもできる実験装置2」
⑥	中庭	中瀬康志	「上黒丸劇場」-月を映す花舞台-

上黒丸 2013-奥能登 秘められた場所から始まるひとつひとつの物語-

## 中瀬康志 「上黒丸劇場」-月を映す花舞台-

Koiji Nakase - "Kami-Karumaru Theatre": a stage reflecting the moon



廃校になった小学校の、建物と森に囲まれた斜面の空間が気になった。階段状になったその痕跡はまるで舞台の観客席のようにも思えた。それはかつてここで学んだ子供たちが花を植えてきた花壇の痕跡なのだと思えた。私は当初からこの地に「劇場」を作りたいと考えていたのだが、それは空間との出会いであるとも考えていた。そしてその劇場は決して大袈裟なものではなく数人が演じ踊る空間が確保されたものでいい。多種多様なもの達の交差、交流する場、そして何かが生み出される空間になればいい。

桃源郷とも言える程の美しい佇まいと風景の上黒丸、そんな中に在る校舎。それは多くの卒業生にとって思い出深いものだと思っても、無機的で合理的なコンクリートの建造物は客観的には風景には馴染まず、学校としての機能を失ってしまった今は余計に不釣り合いな代物だ。

ここでの劇場プランとは、この構造に新たな価値変換をもたらす試みだ。校舎そのものの再利用が活性化すればする程、この劇場も新たな熱を醸成して行く。その為には継続的な関わりとアプローチが必要だ。歌うこと、踊ること、集うこと、協働すること、繋がること。その時、上黒丸の劇場は天の月を映して輝きを増す。



## プロジェクト用スペシャルカー「上黒丸号」

上黒丸アートプロジェクトのための特別車を作りました。

これは、今回のプロジェクトが今後の奥能登全域をターゲットにした継続的なプロジェクトであること、周囲の海を見下ろす奥能登の中央に位置する上黒丸地区を拠点に、「移動、出向く、出張、届ける、つなげる」といった、コミュニケーションとしての役割をより高めようと考えました。荷物の運搬は勿論、アートを積み込んで地域の方々のお宅へ伺うといった、ダイレクトな交流も可能です。3面開きのその構造は常に開かれたアーティスティックな空間へと変わります。

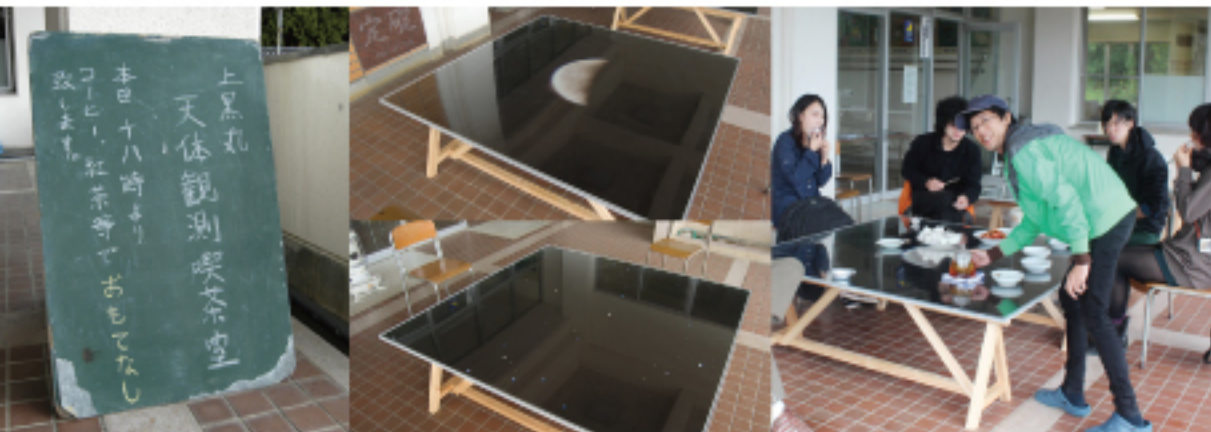
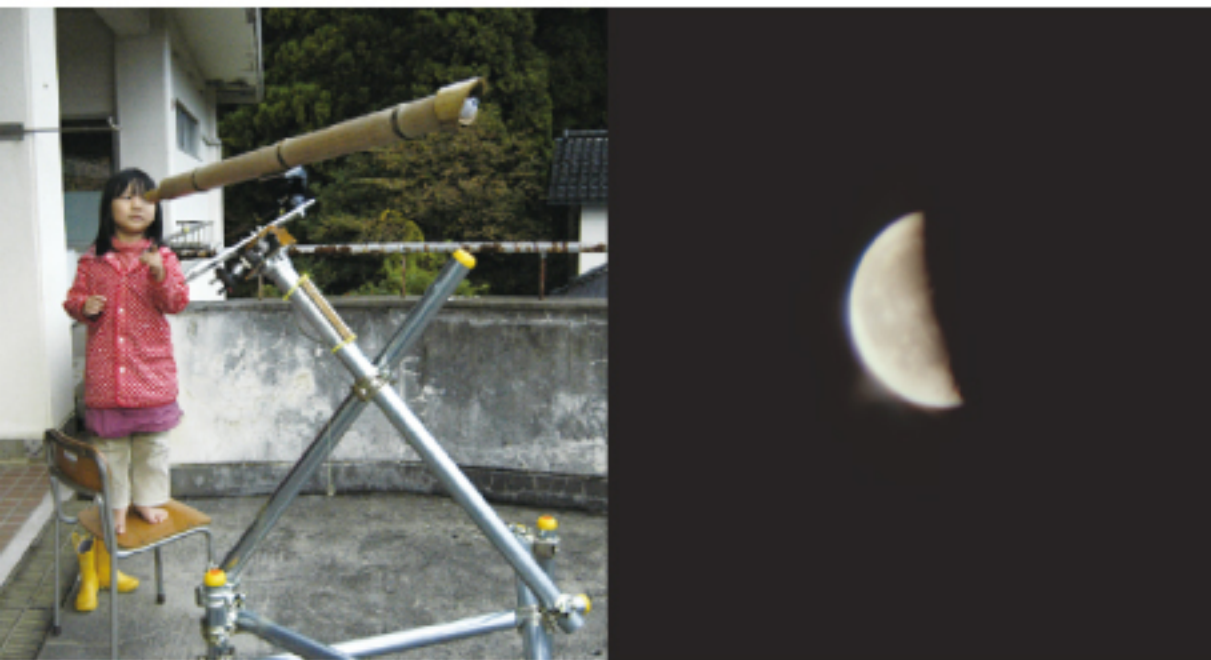




上黒丸 2013-奥能登 秘められた場所から始まるひとつひとつの物語-

## 秋吉かずき 「上黒丸天文台」

Kazuki Abigoshi - "Kani-Karomaru Observatory"



若山町の歴史は現在明らかなことだけでもおよそ800年前まで遡ることが出来るそうです。また、奥能登地域で言えば、真蕨縄文遺跡から、古代の繁栄を知ることが出来る他、伝統的陶芸である珠洲焼きには古墳時代の須恵器の技法が受け継がれていると言われてます。今でこそ政治・経済の中心は東京などの大都市ですが、長い歴史に照らし合わせるとそれはほんの東の国の出来事に思えます。ここ上黒丸地区を始めとする奥能登は、古より多くの人々が関係し続けてきたとても重要な場所と言えるでしょう。

今回私はここで、老眼鏡や虫眼鏡のレンズを使って天体望遠鏡を作り、天体を観測することに挑戦しました。あまり性能のよいものではありませんが、なんとかぼやけた月を見ることが出来ます。テーブルの写真、またプロジェクターで上映している写真はそれぞれここで観測した月や星です。

上黒丸の夜は明かりも少なく天体観測にはうってつけです。この作品が古代より続く若山町の時間とそれを照らし続けた天体の時間、そして一夜一夜をすごす私達の時間を、交差する場所となれば幸いです。

上黒丸 2013-奥能登 秘められた場所から始まるひとつひとつの物語-

## 山内祥太 「瞬く間に」

Shota Yamauchi - "In the blink of an eye"



まる一ヶ月ほど、上黒丸に滞在し、この地に根付く習慣、空気感を味わいながら、人を中心に映像撮影を繰り返しました。私にとって、この地の習慣、環境は共に初体験であり特別なものでありましたが、私が特別と感じる体験も、この地に住む方々にとっては、ある日常の断片でしかないかもしれないと感じました。

そこで私は、彼らの日常の中からこぼれ落ちる癖や仕草を映像として拾い集め、それら、一瞬一瞬の動きを用いて映像を再構成しました。

体育館という広い暗闇の中に浮かぶ映像を、彼らの勇姿やポテンシャルを映し出す鏡として設定し、この作品を観て頂いた方、またこの地に住む方にとって何か、ほっとするような感覚を奮起させるきっかけになること、また上黒丸の空気感、神秘性が伝わることを願って、作品を制作しました。



上黒丸 2013-奥能登 移められた場所から始まるひとつひとつの物語-

## 大湖美幸 「世界を補う空想と遊び、此処の記憶から個々の記憶へ」

Miyuki Obuchi - "Replenishing the World with Fantasies and Playfulness: from collective to individual memories."



この作品は教材や道具に触れたり、椅子に座ったりして頂いても大丈夫です。(※あまり乱暴には、扱わないで下さい。繊細なものもあります。) ちなみに、窓から中庭を望むと見える小さな池にはカエルがたくさん住んでいて、よく日向ぼっこをしていたり、水面から顔が出ていたりします。

今回は、旧上黒丸小中学校という、建物だけではなく歴史も含めた意味での空間を、作品を構成する素材として見做すところから制作を始めました。それは、潜在制作を開始して、各教室をじっくりと見まわった際に、何世代も子供達の学びの助けとして活躍してきた机や椅子、黒板、それに教材や実験道具がこの学校と共に残され、眠っている状況を改めて発見したことがきっかけです。

勉強の視覚的補助の為に作られた教材や道具は、魅力的な形態と面白い仕組みを持っていますが、普段は勉強以外の目的に使ったり、遊んだりしては先生に怒られてしまいます。しかし、子供の頭の中は自由の王国です。やっちはいけない遊びは、より魅力的であり、知らない事や不思議な事は、色んな空想や妄想で補い、自由奔放な想像力によって、新しい物語さえ生み出します。

また、義務教育である小中学校は、基本的に全国どこでも同じ水準の環境が保障されています。故に、学校生活の9年間の記憶は、ほとんど誰もが共通体験として懐古出来るものであり、一方で、もちろん一人一人異なる特別で、唯一の記憶でもあります。

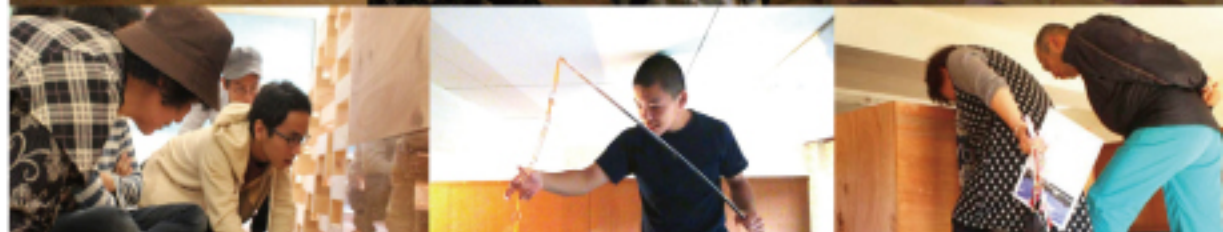
作品をご覧になった方が、この上黒丸という土地や小中学校について、あるいは自分の子供の頃の豊かな心と記憶についてなど、自由に思いや想像を交差させながら、鑑賞して頂ければ幸いです。



上黒丸 2013-奥能登 移められた場所から始まるひとつひとつの物語-

## 別府充貴 「サルでもできる実験装置2」

Mitetsuka Bepu - "Experimental Apparatus Even A Monkey Can Use 2"



「サルでもできる実験装置2」とは、中央下の水槽の中にある石の底面に書かれている言葉を、どうすれば視認することができるかを考察・実践する参加型の装置です。

開口部は上だけです。家族で協力される方も、... 初対面も関係ありません。

目的に向かって、それぞれのカチが生まれます。

普段使っているものの用途ではなく、性質を考えて作っていきます。

参加者は、試行錯誤を繰り返しながら言葉を確認していきます。

こたえ↓

石の底面の言葉は

「いし」!!

参加者が目的に向かっていく「意志」を「石」でもって再認識していただきました。



## てくてく上黒丸

Tekuteku Kamikuromaru

フィールドワーク&アート空間のデザイン:里山や里海の集落や自然の魅力を地域の人たちとのコラボレーションで探索・発見し、発信します。

## ○珠洲のアートフィールドマップづくり

- ・珠洲の魅力は自然や人々の生業(生産、生活、衣食住)そのままアート→海、山の自然環境や集落の営みを探索し、地域の魅力を発見する
- ・候補地は木の浦、飯田、上黒丸(外浦、内浦、内陸の個性的な3地域)を予定
- ・アートフィールドマップの作成(立体地図など)

## ○フットパス計画

- ・最終的には上記3地域から1地域に絞り、魅力のディテールを探り、地域を魅力的に感じることができるフットパスを計画する
- ・回遊ルート開発(例:小川に可愛い橋を架ける、景色のよいところにベンチを置く、竹林にアートを設置する等)
- ・パス沿いの空き民家を借りて掃除・改修→週末限定のカフェの運営、素麺流し、西瓜食べる、バーベキュー etc.)
- ・地域の魅力をアートジンにまとめる
- ・地域の祭りや連携した(空間)提案など

Fieldwork & Spatial Design: In collaboration with the local residents, we will search, discover and communicate the appealing qualities of the villages and nature around Satoyama and Satoumi.

## ○ Creating 'Art Field-Map' of Suzu

- ・ One of the most appealing qualities of Suzu is that people's livelihood and nature (labor, life-style, food, clothing, shelter) are artistic in themselves.
- ・ Three candidate locations are Kinoura, Iida and Kami-Kuromaru (each representing distinct features of Noto, i.e. Japan Sea, Toyama Bay, and the interior, respectively.)
- ・ Creating an 'Art Field-Map' (raised-relief map etc.)
- ・ One candidate location will be chosen for the footpath project.
- ・ Create an interesting walking route (e.g. build an attractive bridge over a narrow stream, place a bench where there is a good view, install artwork in a bamboo forest, etc.).
- ・ Rent a house along the footpath; clean and renovate the house. Run a café on weekends, and offer somen noodles, watermelon, barbecue, etc.
- ・ Post an article in art magazines to promote the appealing qualities of the location.
- ・ Spatial design for local festivals, etc.

参加者 | 坂本英之、石原裕樹、上島未紗子、川上すみれ、谷 清風、戸出彩子、泊 舞香、新田梨佳、林 季里、三上 彩、山内 舜



てくてく上黒丸

## Schedule

## 2013年

8月16,17日	能登再生フィールド学 合同セミナー
8月18日	上黒丸での現地活動
8月21日	再度現地訪問
8月26日	コンセプト会議
9月5日	プロジェクト会議
9月23日	提案プレゼンテーション
10月11日	立体地図・サインの完成
10月12日	前日準備
10月13日	てくてく上黒丸 当日

「地域の人の関わりが生まれやすい集会所として機能している旧上黒丸小学校を中心(ハブ)にして、上黒丸全体を広域な散策路にみたてた魅力の詰まった散策コースと、コースと連動した魅力の発見を促すベンチを提案する。」というプロジェクトのコンセプトを決定。以前から現地で行われていた「素敵なさんぽみち」というプロジェクトとの連携を図る方針を固め、プロジェクト名を「てくてく上黒丸」に決定した。

We aim to create a walking route around an old primary school in Kami-Kuromaru that already functions as a meeting place for locals. The walking route will encompass a broad area of Kami-Kuromaru and introduce many attractive features of the location. Additionally, we will set up a bench along the footpath as a feature of the walking route. Working in conjunction with the preexisting project 'Suteki na Sanpomichi' (wonderful promenade), we will call our project 'Teku-Teku Kami-Kuromaru.'



## プレゼンテーション Presentation

### 第一案「根」 1st plan: the root

自然の中に設置するものである以上、それは土地に根付いていくものであってほしいと感じ、「根」に着目してデザインした案。右は、上黒丸に根付く木をモチーフにしたベンチと休憩所の案。上黒丸の木々を使い、木が生えているように形どった柱の上部に上黒丸の竹を格子状に組みかぶせている。

休憩所



ベンチ



### 第二案「生活に根ざす」 2nd plan: to root is the life

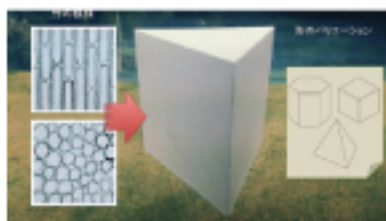
第一案から昇華させた「生活に根ざす」をコンセプトとした案。

上黒丸では耕作という行為が生活に根付いており、特にその中で利用される「はざ」というものがこの地域の特徴的なものであると考えた。そこではざの組み方を利用した構造をもつベンチを提案した。丸太の骨組みと竹をつないだ座面は分離可能なユニットとなっており、ベンチの軽量化とともに、雪の多い冬は安易に持ち運びができるようになっている。



### 第三案「素材で根ざす」 3rd plan: to root by materials

「素材で根ざす」をコンセプトとした休憩所のみ提案。様々な形の三角錐や、六角錐など、四角形の側面を持つ立体をベースの構造とする。それらを木で作る、その側面に、輪切りや、筋に沿って縦に切るなど切り方をアレンジした竹をユニットとして組み合わせる。この提案は、何かのイベントの一つとして上黒丸の地域の方々と一緒に作っていくことも同時に考えたものである。



## 最終プラン Final plan

### ① 立体地図の制作 ② サイン制作

- 1: to make the three-dimensional map
- 2: to make the sign



地図上に上黒丸で採れた穀物や種を並べ、てくてく上黒丸のフットパスコースをマーキングし、名所など各地点をポイントした。

てくてく上黒丸、という、上黒丸の魅力を生くことによって発見してもらう、というプロジェクトの中で、この立体地図はその全体像の俯瞰を目的として作成された。上黒丸周辺は基本的に大小の山がたくさんある中に、その谷の少ない平野部分に村がある、という状態で、村と村は山を挟んで存在している。そのため、道路も山をよける形で湾曲して敷いてある。その影響から、上黒丸を散策していても、感覚として自分の今いる村が地域の一体どの辺りにあるのかわかりにくい。また、上黒丸に長く暮らしている人にとっても上黒丸地域の全体像は視界が山に囲まれているためになかなか把握しにくいものとなっている。そこで、今ある上黒丸地域の等高線地図を基に、積層式に立体地図を作成することで地域の全体像を把握しようと試みた。また、この立体地図上にてくてく上黒丸の三つの散策コースをマッピングすることで、てくてく上黒丸というフットパスコースの散策を始める前に、各コースの距離や勾配などを感覚的な把握も補助できるのではないか、という目的もあった。

てくてく上黒丸の各ポイントごとに散策コースと現在地の情報を記載したサインをデザインした。ポイント周囲の枝などを用いて設置し、周囲の景観と調和するように配慮した。また、出来上がったサインにはすべてオイルステインを施し、風雨の浸食に耐えよう、仕様を整えた。



## てくてく上黒丸

### てくてく上黒丸当日 The day of Toku-Toku Kani-Karumaru

上黒丸の秋の里山をゆっくり散策してみませんか？

会期 2013年10月13日(日)～10月27日(日)  
※期間中はご自由に散策して頂くことが基本となっております。コース地図は「いけのうえ酒店」で配布しております。

初級コース 60分2.5km 上黒丸→二子→上黒丸  
中級コース 120分5.5km 上黒丸→宗米→上正力  
→二子→上黒丸  
上級コース 120分5.5km 上黒丸→白滝→上黒丸





## 北川フラム氏 講演会

Kazuki Abigoshi - "Kani-Karomaru Observatory"



2013年1月13日 場所 珠洲市飯田町商工会議所ホール

珠洲市行政関係者、美術、文化関係者、地域住民など200人程の参加者にスライドによる講演会。新潟大地の芸術祭、そして瀬戸内国際芸術祭の経緯とその成果などを中心にプロジェクトの解説、その意義と自らが考える奥能登の可能性について語る。日本海の極東アジアに於ける位置の概念など、私たちがイメージする、大隈も視野にいれたスケールの内容に大きな感心と期待が寄せられた。終了後は懇親会にて多くの質問や議論も行われた。

終了後の質疑応答も活発に行われ、今後の展開と活動に向けたアドバイスの他、北川氏自身のこの地に対する興味の所以や前向きな関係構築への意欲も語られた。



奥能登シンポジウム

## 奥能登の「生きる」を楽しむ「大地と文化の耕作」

Enjoy the 'lifestyle' of Oka-Noto through 'cultivation of land and culture'



2013年11月30日(土) 14時～15時 場所 上黒丸生涯学習センター(旧上黒丸小学校)

パネラー

- 澤信俊 金沢星稜大学特任教授、NPO法人奥能登日置らい理事
  - 桑原 敏壽 「芸術村」を促進する神奈川県横浜市、旧藤野町にて共同出資による「藤野アートヴィレッジ」を企画、運営。
  - 岩田草平 少数民族と現代アーティストのプラットフォームをつくる団体「Prominority」の代表。
  - 辻ノ上草 上黒丸ステキな数多道実行委員会代表
  - 兵衛啓朗 金沢美術工芸大学教授/NPO 法人金沢アートダミ理事長、奥能登アートプロジェクトの仕掛人。
  - 豊嶋秀樹 gm projects メンバー/作品制作、キュレーション、企画、空間構成、ワークショップなど幅広いアプローチで活動。
- モデレーター
- 中瀬康志 作家・金沢美術工芸大学教授/同屋まちスタジオ運営の他、屋外でのプロジェクトの企画、運営、参加など多数。



## 奥能登アートプロジェクト参加記

坂本英之

関わりのかっけは、2012年夏の「大池の芸術祭 越後豪有アートトリエンナーレ」です。高品作家の一人として参加させていただいた東田沢集落の会場に、石川ナンバーの車で現れたのが平蔵展覧会をはじめとする珠洲市からの視察団でした。彼らは、奥能登にアートによるまちづくりを進めるために、2000年のスタートから10年を折けて世界中からアートファンを集めるようになった越後の山深い集落にやってきたのです。

遡って、2011年に「能登の里山里海」が世界農業遺産(国連食糧農業機関(FAO))の認定を受けました。豊かな自然環境と伝統文化を継承し、文化、景観や生物多様性に富んだ環境が、社会や環境の変化に適応しながら長い時間をかけて形成され、発達してきた里山里海(二次的自然環境)を農業・林業を含む広い意味での農業上の豊かな土地利用のあり方として世界が認めたのです。

これら二つの事例をつなぐものは何でしょうか。そこには答えになるいくつかのキーワードがあるでしょう。例えば、持続可能性、内発性、多様性、柔軟性、創造性、脱大量生産、地産地消、産業誘致から人材誘致へ……等々。大きな背景としては、世界的な経済及び社会の構造変化による要因が考えられます。例えば新興国の台頭により、これまで先進工業国といわれた国々の産業の基盤が揺るぎはじめています。さらに環境問題などの要素も加わり、脱工業化社会に対する新しい社会ビジョンが強く求められはじめたことがあげられます。

また、少子高齢化による社会構造の変化、人口減少や地域の縮小を考えた新しいパラダイムへのシフトの一端としてのアートの存在があります。廃業した造船所や工場・倉庫跡地などの遊休地(ブラウンフィールド)が都市やその近郊に広く出現し始めました。また、中心市街地では空き家やビルの空き室などが溢れ、対応が始まっています。それらの空間を促したアーティストの滞在制作「アーティスト・イン・レジデンス」などによるまちの活性化は世界中で枚挙にいとまがありません。

しかし、今見逃せないのは、創造性を発揮しうる社会のあり方を唱える動きの活発化です。文化と経済の両輪が適切にかみ合うことにより、豊かな社会を築くことができるという考え方の普及です。これ

は芸術にとどまらず、あらゆる分野における必須項目となるでしょう。これらの思慮は、これまでの「もの」の豊かさの追求の偏重から反省して、文化経済学という分野などから、新しい経済のあり方を探る動きへと発展しています。

私の専門は建築・都市・ランドスケープに関わる空間デザインです。とくに歴史的環境を活かしたまちづくりを中心テーマとして、自然環境や経済環境を含んだ持続可能性を追求し、実際にいくつかの自治体で市民主体のボトムアップのまちづくりを実験的に試みています。世界をつなぐ言葉となったアートを軸に、周囲から断絶されたような、しかしかつては海をつなぐ交流の拠点だった半島の先端の地で、持続可能な地域づくりとは何かを自分なりに考えていきたいと思っています。

学生が主体で、研究室がバックアップする体制が私たちの参加のスタイルです。地域を知り、地域に溶け込んだ建築、集落、デザインを学び、提案する場づくりを進めるために、地域資源やそれに関わるデザインなどのサーベイを行いました。

まず、初年度の2013年は、地域を知り、内外に発信するプロジェクト「てくてく上黒丸」を立ち上げました。地域のガキに教わり、地域を歩くルートを考えました。地域に教わり、地域の人々と暮らしを教わっています。続いて、「立体地図」を作成しました。平面的地図では判読できない地形や地表の情報を盛り込むことを目標にしました。参加学生は環境デザイン専攻の1年生9名です。これから継続して関わっていく者もいることでしょう。プロジェクトと共に成長していくことを願っています。

## Oku-Noto Art Project Diary

Hideyuki Sakamoto

It all started in summer 2012 at the 'Echigo-Tsumari Art Triennial.' I arrived at the venue in Higashi-Tazawa village as one of the exhibiting artists and I immediately noticed a group of cars bearing Ishikawa Prefecture license plates. I later found out they belonged to the inspection team from Suzu led by Mr. Toyoshi Heizo, a member of the Ishikawa Prefectural government.

The delegation was set up to pursue development of the Oku-Noto region through art activities. Therefore, their mission was to learn how this festival in a remote area of Niigata Prefecture that only began in 2000 was able to attract a great number of art-lovers from around the world barely a decade later.

In 2011, 'Noto's Satoyama and Satoumi' was registered as a Globally Important Agricultural Heritage Site (GIAHS) by the Food and Agricultural Organization of the United Nations (FAO). The people of the Noto Peninsula have successfully preserved their beautiful scenery, natural habitat, and human activities and culture. Their efforts to maintain a harmonious relationship with nature, agriculture, forestry, fisheries, and other industries against societal and environmental changes was recognised.

What are the key concepts that connect these things? I believe there are many answers; for example, sustainability, local initiative, diversity, flexibility, creativity, anti-mass-production, local production, local consumption, attracting enterprise and human resources. All of the above can be summed up as a reaction to the changes in the socio-economic global structure. For instance, the emergence of "developing nations" in recent years has affected the industrial structure of "developed nations." In addition, global environmental issues have fostered a demand for a societal shift towards a more post-industrial and environmentally friendly society. Furthermore, rising life expectancies and declining birth rates are contributing to the depopulation of rural areas, transforming the foundation of our social structure. A societal change of this scale must be met with a fundamental change -i.e. a paradigm shift. 'Art' will no doubt play an important role in this process. "Brown-field sites" such as abandoned factories, shipyards, and warehouses are appearing in great numbers in and around cities. In response to increasing numbers of empty houses and vacant apartments in city centers, programs such as "artist-in-residence" and other resi-

dency opportunities make use of these urban spaces in an attempt to promote artistic endeavors.

However, the most remarkable change currently taking place is the increasing number of people taking part in this cultural discourse by showing their support for a more creative society. We are starting to realise that in order to create a prosperous society, both culture and economy must advance towards the same end. This principle applies not only to the world of art but to all human activities in general. This way of thinking reflects our new understanding of prosperity and a consequent rejection of excessive pursuit of material affluence. We are starting to explore new economic theories for the future from the standpoint of cultural economics. My expertise lies in architectural, city, and landscape spatial design. In my work, I am concerned with preserving the historical environment, emphasising the importance of the sustainability of natural surroundings and economic systems. In fact, I am currently involved in a few projects where I have employed the "bottom-up" initiative model of community development. Located at the tip of the Noto Peninsula, Oku-Noto is geographically isolated. However, it has a proud history of being a vibrant hub of medieval maritime trade. It is my firm belief that art brings people together, and there is no better place than Oku-Noto to promote sustainable, art-based community development.

The students are expected to take the lead and the university is only there to provide support. First of all, in order to get to know the area, the village, its architecture and local design, we conducted a survey for the site-specific design.

In 2013, our first year of operation, we started a project called "Teku-Teku Kami-Kuromaru" that involved getting to know the area and reporting our findings. Learning from the locals, we created a walking route of the area and we continue to learn about the lifestyles of the local people. Next, we created a 'raised-relief map' in an attempt to display detailed information about the terrain and surface features that would not be possible on a flat map. Nine students majoring in Environmental Design participated, and I'm sure some of them will continue to be involved in this project, and hopefully it will inspire them in their studies.



## 珠洲・土・火・環日本海

真鍋淳朗

これまで金沢市内を中心に、アートプロジェクトやアートを通じて人々が出会う場としてのオルタナティブスペースの構築を行ってきた。さらに、その活動を真珠産地へつなげて、環日本海の東アジアとの古くて新しいネットワークの再構築をめざしている。

そのネットワーク再構築の一環として始めたのが「珠洲焼プロジェクト」である。珠洲の地で作陶用に新たに掘られた土で制作された作品群を中世の様式で復元された窯（あながま）で焼成した。

「珠洲焼インスタレーション」では、珠洲の土の焼きしめの還元による発色とテクスチャーのみの効果と可能性に着目し40cm×40cm×2.5cmの陶板を制作した。その陶板上に珠洲の上げ式土器を構成した作品を床に配置し、その地域の特性を活かしたサイトスペシフィックな表現を試み古民家や美術館で展示した。作品の設置方法の展開や建築空間への応用など新たな活用を意図したプロジェクトであった。

「風の音ワークショップ」では、5000個の風鈴を学生たちが制作した。里山のはぎ掛けに風鈴を取り付け、風の音が聞こえて風の流れが視覚化された、周りの自然と一体化した表現となった。また、珠洲市内数カ所でも地域住民と学生たちとの共同作業によって風鈴が展示され、いずれも地域に根ざしたアートによる連携を提案した。

「新たな珠洲焼の可能性検証事業」では、プロの陶芸家による、珠洲焼プロジェクトの根幹となる検証実験が行われた。珠洲市内の複数の場所から土を採取し、土の分析から始まり、中世の焼成法を実証する試みが続けられ資料館やギャラリーで研究発表された。これからも中世当時の珠洲焼の焼成方法の検証実験と、今後の産業化に向けたデータ蓄積をめざしていく。

中世日本の広範囲に流布していた珠洲焼の遺構は、中世の珠洲産が須恵器系工人を環日本海の東アジアより招聘し、陶土を確保するため珠洲地域の採土場を開発し、多数の窯が作られ、広域にわたり需要のあった焼き物の特産地として珠洲地域が開発されたことを意味している。中世の珠洲陶器に中国陶

器の影響を受けたものや朝鮮陶磁に共通した加飾法が認められることから、まさに真珠産地域が中世における文化・経済・産業交流の窓口であり中心地であったことを物語っている。今後、新たな珠洲焼の可能性を展開するためには、歴史的な文脈を背景にした学術的研究も並行していく必要がある。

現代のアートによる未来につながる物語を始めるにあたり、日本列島の転軸に関わる論議として環日本海東アジア論に取り組み必要がある。中世の東アジアにおける焼き物研究を一つのきっかけにして、人間の基本的な生活行為の中からアートを思考する試みが重要である。それは、縄文時代から脈々と受け継がれてきた日本と東アジアとの交流が現代において再構築され、これからのアートを熱成させるインキュベーションとして、世界に発信し受容していく文化交流拠点としてのグローバルな場が真珠産地に創成されることである。

## Suzu - Earth - Fire - the Japan Sea Rim

Junro Manabe

Until now, we have been working to create an "alternative space" in Kanazawa that would facilitate art projects and the meeting of various people with common interests.

We began the "Suzuyaki Project" as part of a scheme to establish a network of people. Using clay from Suzu, we fired the pieces in an anagama ("cave") kiln restored to its original medieval specifications.

For 'Suzuyaki Installation', we colored and textured the slabs of clay through the processes known as yakishime (high-fired, unglazed) and kangen (heat reduction), and created ceramic panels which measured 40cm x 40cm x 2.5cm. Inspired by the unique characteristics of the region, we placed locally farmed salt on the panels and then installed them on the floor at site-specific venues such as local museum and a traditional house. Through this project, we intended to explore various methods of installation in order to use the architectural space within the venue effectively.

For 'The Sound of the Wind' Workshop, the students created five thousand wind chimes. They then went to the Satoyama area to affix the wind chimes onto racks normally used by farmers for drying rice. Through this medium, we were able to listen to the wind and to visualise its movement through the air, resulting in an artistic expression integrating the surrounding nature into its design. Furthermore, with the help of Suzu residents, the students were able to implement the same project in an urban environment. The project was successful at both settings as a result of collaboration with the local people.

For 'New Potentialities of Suzuyaki Project', professional ceramic artists undertook a series of experiments that were at the heart of the project. To begin with, clay was collected from a few locations in Suzu for the purpose of analysis and evaluation. The results were then made public in relevant museums and galleries. Going forward, we will continue to accumulate more data as part of the effort to revive the tradition while preparing for its impending commercialisation in the future.

The roots of the Suzuyaki used extensively in medieval Japan can be traced to the immigration of continental

pottery to Japan. It is speculated that the kiln located at Suzu invited skilled potters using the Sueyaki style from other parts of the Japan Sea Rim region. A remarkable development ensued after immigrant potters founded mines for the extraction of clay and built numerous anagama kilns in the region. The Suzuyaki from this period was strongly influenced by Chinese porcelain, and many pieces also illustrate the decorative methods used in Korean porcelain. This tells us that in medieval Japan, Oku-Noto emerged as a hub for industrial activities around the region, thus functioning as a gateway of cultural and economic exchange. As we look towards the future, and explore the potential of modern Suzuyaki, we must also deepen our understanding of the historical background and context from which it emerged.

In order to advance today's art scene in the future, we need to engage in the narrative of the East Asian community encompassing the Japan Sea Rim, which is fundamental to furthering our understanding of the history of the Japanese archipelago. In studying the medieval history of East Asian pottery, we must reassess the meaning of art as an intrinsic part of basic human activities. The long standing relationship between Japan and East Asia, which dates back to the Jomon period (circa 14000-3000BCE), must be re-established in today's settings through reinstating the Oku-Noto region to its former glory as a cultural hub and a "glocal" center for artistic pursuits.



## 見果てぬ先の桃源郷

中瀬康志

2012年よりフィールドワークによる現地調査から始めたこのアートプロジェクトへの思いとは、言わば一種のロマンにも似た感情を湧き立たせるものだった。

「奥能登」をターゲットにしながらも、そこからさらに環日本海文化や大陸へと連なるその歴史と広大な地平への純粋なイメージは、アーティストや冒険家が夢見る、見果てぬ先の希望のようでもあった。こうした想いはさらに多くの奇跡とも思える関係をも生み出してくれる。当初、私達の脆弱な活動組織がまずどの場所を拠点とするかは重要な課題であった。個人的な習性でもある地理上の先端「先っば」に対する好奇心も重なり、能登半島先端、珠洲市は私にとってまさにそうした出会いの中で必然的に導かれた地のようにも思えた。

一方で俯瞰してみれば日本の文化がアジアからの東漸の果てのものだとすれば、奥能登、珠洲は位置的にも特にその重要な入り口のひとつであったらうし、現在に至ってはさらにそうして受け止めた文化を弓矢のように外界へと放つパワーに満ちた地点とも見える。

しかし、どうだろうか？こうした夢を現実に戻せば、アートプロジェクトなどある意味とても身勝手なものなのだ。アーティストが大学の職を背中に背負ったとして「ここが気に入った」からと言って他者の場所で行うことができるわけでもない。そこはとて高度な関係の構築が必要だ。つまり人と人との最小単位の信頼関係から育んで行く方法以外無いのだ。私がプロジェクトの拠点とした上黒丸地区での心地良さとは、そうした思いを受け止め、そして必要と認めてくれた人がいたことの幸運さだった。奥能登の先端、そしてさらにその中央の山麓の廃校となった小中学校を拠点とし、学生たちと「アート合宿」しながら寝袋持参の活動がスタートしたのである。

念願だった一回日の展覧会にも何とか着き着け、そしてチャーターした大学のバスで多くの学生運も来てくれた。金沢から150キロ、時間にして休憩入れて3時間の小旅行。海沿いを走らなければ奥能登へ来て海には触れずに山だけを見て帰る事にもなる。その意味では時間を作っても同方を堪能するのがこの奥能登

の醍醐味ではあるだろう。それはそれとして、遠目には際立つ山とは言えないが地区のシンボルでもある「宝立山」を擁する典型的な黒山「上黒丸」には、とてとて一日では味わうことのできない多くの宝物が存在している、そのことの事実気づくことこそ重要だ。学生達が純粋にアート鑑賞に来たとしても、私たちの今回の展覧会の目的は、この地域に存在する自然、文化、人、伝統、歴史、そして空間の特性など多くの要素からそれぞれが何ものかを紡ぎ出し、特性のアートに変換し表現し伝えることである。この場でしか成立しないことの重要さは、イコール、作品という視点に於いてもそのオリジナリティを十分に備えているかが同時に問われる。「自然観察」というお決まりの教育テーマは、内向的で閉じた学内のアトリエで素材を見続けただけでは見いだせるものではないだろう。現実的な社会や自然と対峙する中でこそ育まれるものも大きいはず。そこでは自立した個が求められるのだ。手の中を見続ける作業とは、背後に広がるこうした世界と直結させることでもあるだろう。廃校となった小中学校、その記憶、隣接する深い森、葉の大地に浮かぶ月、奥能登先端の山。ここにはそうした大自然と共に生き育まれた文化や生活があり、そこに生きる人がいる。さらに日本海の潮の流れ、大陸へ向かう風へと広がって行くのだ。

私の学生達へのプレゼンテーションはこうした現場から発生したエネルギーを体内に取り込み、熱を持ってその夢語ることに過ぎないのだが、彼らは何を感じ取ってくれたらうか。時代は彼らが人々と一緒に創り産み出して行くのだから。

## Peach Blossom Land beyond the Horizon

Koji Nakase

Starting off with a field survey in 2012, we now recall that the entire project was driven by a kind of romantic desire.

Although we have chosen Oku-Noto region as our field of operation, our vision extends far beyond the horizon to encompass the great variety of cultures around the Japan Sea Rim, and of continental Asia at large. Our sincere admiration and longing for the vast land beyond the horizon was similar to the kind of excitement felt by an adventurer in the face of uncharted territory. Such fascination resulted in incredible encounters. Choosing an appropriate location for our project was the first great challenge we faced. Supported by man's instinctual attraction to promontories, we ended up choosing the Noto Peninsula. However, looking back on the series of encounters and events, it seems that we were somehow led to Suzu by fate.

Historically speaking, if we consider Japanese culture as the culmination of Asian culture's eastward advancement, Oku-Noto must have functioned as an important geographical entry point. In the present day, the culture that was received and nurtured in Japan is now ready to be released back to the outside world. The Oku-Noto region acts like the fulcrum of a bow and arrow; the potential energy stored in the region awaits its release.

Art projects can be very self-indulgent. Even if an artist, possibly with a university position, finds a particular location congenial to his or her artistic endeavor, it does not necessarily mean success is guaranteed. In an alien environment, one must first build a strong relationship with the local people. In other words, a trusting relationship must be established. I was able to feel very comfortable in the Kami-Kuromaru district because I was fortunate enough to meet people who welcomed me with open arms. At the beginning of the project, each of us brought our own sleeping bags and stayed in a former school building at the foothills of Noto Peninsula's central mountain. It was almost like an "art camp."

Finally, we were able to organize our first exhibition.

We hired a university bus and many of our students were able to join. It's 150km from Kanazawa and it took three hours with brief stops. If we choose not to drive along the coastline, it's possible to travel round trip to Oku-Noto without viewing the sea, but that would be a shame. In order to enjoy everything the Noto Peninsula has to offer, one should make time to experience both the sea and the mountains.

Mt. Horyu may not stand out when observed from afar, but it is an important symbol of the district. The nearby settlement of 'Kami-Kuromaru' is a typical Satoyama, and a repository of hidden treasures. It is important to realize that it cannot possibly be appreciated in one day. The purpose of this exhibition is to learn about the region's nature, culture, people, traditions, history and special characteristics. We need to express these things through our artwork.

In the true sense of the term, "natural observation" is not possible within the confines of the introverted and closed environment of an educational institution. There is only so much that one can achieve from working in the comforts of the studio, using the materials provided by the school. Instead, it is important to go outside and to face society or nature as an independent individual. Abandoned schools with memories attached, forests, moonlit lands and mountains. People live here. Their culture and way of life is deeply entwined with nature.

Since arriving here, my passion has been rejuvenated. In my presentation for the students, I could only talk about my dreams, goals, and aspirations. I wonder what they thought and felt. They are the next generation, and they will write the next chapter in history.



## 軽トラでアート出前

珠洲・上黒丸



**美大などプロジェクト  
滞在制作や展覧会**

【珠洲】芸術大学や専門学校など、地元でアートプロジェクトを展開する「Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art Project 2013」が、12月13日（土）に珠洲市立上黒丸小学校で、軽トラを使ったアート出前プロジェクトを開催した。この日は、地元でアートプロジェクトを展開する「Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art Project 2013」のメンバーが、珠洲市立上黒丸小学校を訪れ、軽トラを使ったアート出前プロジェクトを開催した。この日は、地元でアートプロジェクトを展開する「Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art Project 2013」のメンバーが、珠洲市立上黒丸小学校を訪れ、軽トラを使ったアート出前プロジェクトを開催した。

北越新聞 7月15日

Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art Project 2013

北越新聞 10月14日

地元でアートプロジェクトを展開する「Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art Project 2013」が、10月14日（月）に珠洲市立上黒丸小学校で、軽トラを使ったアート出前プロジェクトを開催した。



**金沢美大生作品  
鑑賞し平山散策**

珠洲でアートプロジェクト

【珠洲】芸術大学や専門学校など、地元でアートプロジェクトを展開する「Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art Project 2013」が、10月14日（月）に珠洲市立上黒丸小学校で、軽トラを使ったアート出前プロジェクトを開催した。この日は、地元でアートプロジェクトを展開する「Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art Project 2013」のメンバーが、珠洲市立上黒丸小学校を訪れ、軽トラを使ったアート出前プロジェクトを開催した。

## 水のスクリーン 上黒丸に

監修 金沢美大生が制作  
アートウォークで紹介



北越新聞 10月13日

北越新聞 10月13日

## 「クリエイティブおばあちゃん」 美大生も称賛 手芸で初個展



「クリエイティブおばあちゃん」美大生も称賛手芸で初個展

【珠洲】芸術大学や専門学校など、地元でアートプロジェクトを展開する「Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art Project 2013」が、10月13日（土）に珠洲市立上黒丸小学校で、軽トラを使ったアート出前プロジェクトを開催した。

「クリエイティブおばあちゃん」美大生も称賛手芸で初個展



「クリエイティブおばあちゃん」美大生も称賛手芸で初個展

「クリエイティブおばあちゃん」美大生も称賛手芸で初個展



### 奥能登里山里海アートプロジェクト 二〇一三

会期： 2013年1月-2014年3月  
会場： 旧上黒丸小学校、上黒丸地区、古民家もより、  
珠洲焼資料館  
参加作家： 秋吉かずき、板橋廣美、石原裕樹、岩佐美希、  
上島未紗子、梅澤綾子、瀧大海、神谷桃子、  
川上すみれ、倉持歩、豊江明、合田精、坂本  
美之、白石くるみ、新谷雄太、田島志穂理、谷  
清風、土井安二、戸出彩子、戸出雅彦、泊  
舞香、中川菜里乃、中瀬康志、新田崇佳、林 季  
里、原田昌典、別府光貴、真鍋淳朗、三上 彰、  
榎倉栞恵、山内裕太、山内 舜、吉村安可  
協成： 平成24-25年度石川県大学・地域連携研究  
プロジェクト支援事業  
主催： 奥能登里山里海アートプロジェクト実行委員会  
記録誌：  
編集・デザイン 上田陽子(金沢アートダミ)  
翻訳 the Art of Travel  
発行日 2014年3月31日  
発行 奥能登里山里海アートプロジェクト実行委員会

### Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art Project 2013

Date: January, 2013-March, 2014  
Venue: Former Kamikuromaru Elementary School,  
Kamikuromaru area, Old minka Moyori,  
Suzuyaki museums  
Artists: Kazuki Akiyoshi, Hiromi Itabashi, Yuki  
Ishihara, Miki Iwasa, Misako Ueshima, Ayako  
Umezawa, Hiromi Kaede, Momoko Kamiya,  
Sumire Kawakami, Ayumu Kuramochi, Akira  
Koie, Kozue Aida, Kurumi Shiraiishi, Kenta Shin-  
ya, Shiori Tajima, Kiyotaka Tani, Koji Doi, Saiko  
Toide, Masahiko Toide, Maika Tomari, Marino  
Nakagawa, Koji Nakase, Rika Nitta, Minori  
Hayashi, Masanori Harada, Mitsutaka Beppu,  
Jyunro Manabe, Aya Mikami, Kozue Momiku-  
ra, Shota Yamauchi, Shun Yamauchi, Yasuji  
Yoshimura  
Supported by: Ishikawa Support Project for University  
and Society Collaboration in FY 2012, 2013  
Presented by: Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art  
Project Executive Committee  
Catalog:  
Editors&Design Yoko Ueda (Kanazawa Artgummi)  
Translation the Art of Travel  
Published on March 31, 2014  
Published by Oku-Noto Satoyama-Satoumi Art  
Project Executive Committee





奥能登里山里海  
アートプロジェクト  
活動記録誌 二〇一三